164
667

重扇助著作

演劇脚本

接木根岸礎

全

演劇脚本

接木根岸礎

場割

序幕　氏神祭禮の場
　　小間物屋裏手塀外の場
　　同　離座敷の場
二幕目　同　面藤三内の場
　　小間物屋内の場
　　同　請小家の場
　　地蔵堤殺しの場
三幕目　吉蛙伊八内の場
大詰　白洲吟味の場

演劇脚本

接木根岸礎

序幕　（氏神祭禮の場）（小間物屋裏手塀外の場）（同離座敷の場）

役人替名

一俱利加羅四郎太郎　一子分市五郎
一金神の伊三郎　一番頭重兵衛
一娘　お菊　一小間物屋龜右衛門
一丁稚　定吉　一信樂作十郎
一子分　熊吉　一下女お登和
一同　吉五郎　一両面藤三
一同　三太　一温飩屋一人
一同　權治　一按摩一人

遊物平舞臺向ふ屋敷塀眞中に石の鳥居此柱に高張左右に建是に御神燈と書てある右塀の所々に高張建都て氏神祭禮の体下手に葭簀の茶店酒肴の看板幕の内より吉五郎市五郎喧嘩す

るを熊吉止めて居る宮樂神にて幕開く　吉、市「兄分退んせ〳〵」　熊吉「イヤ退ない一体手前達は兄弟分の中で居ながら何を喧嘩するのだ　市五郎「どうといつたら市の野郎が本町の小間物屋の娘を色だといやァがるから起つた事だはな　市五郎「何吉のべら坊めがあの娘を嗅にして見せるといやァがるからさう仕られちやァおいらが顔が立ねへからあの野郎をば打くじくめだ兄分退て下んせ〳〵　熊「置きやがれ何ぞ氣の利た喧嘩かと思つたらいけもしない顔で戀いさかい手前ばつかり氣を揉みやがつて先の女は何にも知らないのだハ、、、○時に親分がいつたのはカウ吉や下谷邊に四郎太郎が居るから呼で來いといつたぞよ親分は地内の湊屋に待て居るから早く尋ねて來るがい、　吉「夫じやァ尋ねて來う迷子の〳〵四郎太やアイ　熊「鹿馬をいふなへ　吉「チットしよ〔ト向ふへ這入る」　熊「親分が待兼て居るだらう市や湊屋へ行うか・市「兄貴中直りの酒ではづまにやなるまい　熊「吉が歸つたら中直りさせてやらうよ　市「ろんなら兄分　熊「サァ來や〔ト上手へ這入る向ふよりお菊龜右衛門お登和定吉出て」　龜右衛門「今日は天氣がよい故保養になるのう　お登和「左樣でムり升お天氣がよいので氏神樣も賑やかな事でムり升　定「申旦那さん脊中の辨當が氣になつて〳〵歩かれぬ向ふの茶店で此辨當を輕ふ仕たらどうじやいなァ　龜「何をいひおるのじや　登「イヤ〳〵御寮人樣のお身では餘ッ程の道のり旦那樣も暫く御体足被成升せぬか　龜「さう仕升せうそんなら

お菊「お菊さん　登「サアお出被成升せ○〔ト四人舞臺へ居直り〕サアお休み被成升せ　定「ヤレ嬉しや苦痛を助つたお登和さん辨當出さうかへ　登「エヽまだじやわいなア　菊「コレお登和彼お人はまだ見へぬかや　登「ハイ大方まだで厶り升せう　龜「コレ娘彼人とは何の事じや　菊「エヽ　登「イヤ申旦那樣夫はヲヽ夫々此氏神樣の森には斯ういふ○〔ト手を鼻に當てゝ〕「お人がたんとお出被成升とおつしやり升のでム厶り升わいなア　龜「ろんなら天狗がムるかや　登「イヤモウ日が暮前羽根を叩いて巣をこのけに歩かしやり升るコレ定吉どん言事を聞かしやすせぬと其天狗樣が攫んで行しやんすぞへ　定「ろんならちやつと辨當を喰て日の暮れぬ内にいかうじやムり升せぬか　龜「ヲヽ歸り升せう〳〵ノウ娘　菊「夫でも私ば　登「イヤ申何にもおつしやり升なナア○申旦那樣御參詣被成升せぬか　龜「さう仕升せう〳〵〔ト上手より重兵衛出て　重兵衛「是は〳〵旦那樣御寮人樣御參詣でムり升るか　龜「ヲヽ番頭殿てなたも參詣さつしやつたか　重「イエ私は両替町へ爲替の事で參り升て戻りよ一寸參詣仕升てムり升る　龜「夫は御苦勞でムつたのうイヤ番頭殿此中一寸話した娘が緣組の事何と思はつしやるの　重「ヘイ緣組と申升るものは親御樣の儘にもなり升せぬノウお登和どん　登「ハイ左樣でムり升る先御寮人樣へとつくりと御相談被成升が宜しうムり升る　菊「コレお登和わしや嫁入は否じやわいなア〔ト重兵衛烟管でお菊に何にもいふなと思入　登「宜しうムり升るどの樣に旦那樣がおつしやつても滅多よ嫁入はさせ升事じやムり升せぬ○〔ト重兵衛又お登和の袂を引く〕「イヤアノ嫁入をさせ升せいで何と致し升せう　重「成程お登和どんの言通り何時迄お内よ置升ても旦那樣のお心使ひ早うお嫁入り遊ばす方が宜しうムり升るぞへ　登「申旦那樣爰は途中でムり升故此お談しはお止めに被成升せナア番頭さん　重「成程お歸り被成てからの事に被成升せ　龜「何の今いはいでもよい事をコリヤ私が悪るかつた　重「私は帳面り仕さしでムり升れば お先へ歸り升　龜「ろんならモウ歸らしやるゝ　重「ヘイお登和どん今日は樂しみな事じやなア　登「うだ〳〵いはしやんすなアノ旦那樣のしわん坊がつくりと被成升せ〔ト重兵衛は向ふへ四人は上手へ這入る向ふ戸家の内より〕　吉五郎「兄分早く歩みろといふに○〔ト四郎太郎の跡より吉五郎附て出て〕「ソレ浮雲ねへ　四郎太郎「何だ浮雲ねへよしてもくんねへ此位の酒で醉ていゝものか酒は呑んでも　吉「勤る所は勤るといふのか　四「ナヤ手めは飛だすいになつた一盃はづむから悦びねへ　吉「先觸のあつた奴に呑ました例法いねへよ　四「何にもいはずにおいらに附て湊屋迄來さつせへ○〔ト舞臺へ來り〕「さうして親分い湊屋に居るのか　吉「さうさ早く行うじやないか　四「ナヽ往かう〳〵○〔ト上手を見て〕「カウ吉あんな別品が來るせ　吉「何別品だ○ありや本町の小間物屋の娘だ　四「

夫じやおれが色だから見たくもねへ　吉「ハヽヽヽこいつは大笑ひだ誰がおめへの様な生酔男を色に持つ奴があるものか　四「何おいらの色に違ひねへのだ　吉「お前があの娘を色に仕たらおいらが首をやるよ　四「何だ手めくの首をくれる有難へ先づ首が一つ儲つたといふものだ〔ト吉五郎にかゝるを〕　吉「ナイ〳〵待てくんな娘が色のどうだか知れも仕ないに大事の首をさう易く取られていゝものゝ〔ト上手よりお登和お菊定吉出て〕　お登和「一寸物がお尋ね申たうムり升る最前から爰へアノ廿三四な色白な　四「何だ色白な夫からどうだね　登「ヤア此跡はお菊様お聞被成升せ〔ト四郎太郎の前へ押てやる〕　吉「ヨウ〳〵兄分味い〳〵　登「今の跡はくつきりとしたよい男と參り升せなんだかいなア　吉「そんなら其人を兄分に　登「お尋ね申のでムり升る　吉「大しくじりだ　四「おいらはろんな男は見ねへよ　吉「兄分こんな所に長居仕ちやアどんな掛り合にならうも知れねへ行うじやねへか　四「さうさ行う〳〵〔ト鳥居の内へ遺入る〕　登「御寮人様まだ見へねと見へ升るわいなア　お菊「あれ程迄にいふて置たのに本に辛氣な事じやわいなア〔ト上手より三太權治市五郎出て〕　三太「噂の高い小間物屋の娘　權治「おいらの仲間へちつとの間　三人「貸て貰ひたい　登「アヽ申滅相な事被成升ると女子じやとて聞く事じやムり升ぬぞへ　權「四も五もねへ引かつげ　二人「合點だ〔ト お菊を引かつがうとする向ふより伊三郎出て直ぐに舞臺へ來て三人を投退ける　登「ナヽ伊三郎さんよい所へ來て下さんしたなア　伊三郎「お登和さん案じる事はねへ　市五郎「アイタヽヽヽヤイ青二才め　三「何でおいらを　三人「投さらしたのだ　伊「投たらどうしたおいらが出入先の御寮人をはてゝんどう仕やアがるとうぬ等が爲にならねへぞ　市「此野郎からぶつくじけ　二人「合點だ〔ト立廻りあつて三人橋掛りへ逃て這入る〕　登「伊三郎さんお見事〳〵定吉「手の内見へた遁れ〳〵　登「エヽ何をいふのじやぞいなア　伊「時にお登和さん今日は御寮人様とお二人で來たのかね　登「イエ旦那様も一所に來升たが御地内の茶店に休んでムる間よ御寮人様がお前に何やら御用があつて爰へ來たのを今の人達が御寮人様を引立て行所へお前が見へたのじやわいなア　伊「そりや浮雲所であつたね〔ト お菊弥を出して〕　菊「コレお登和此みを　登「私が呑込でおり升る○申伊三郎さん心の丈をお書被成た此弥しつかり讀で下さんせへ　伊「アノ此みをお菊様が　登「アイなア〔ト龜右衛門上手より走り出て　龜「ナヽ娘爰に居やるか今聞た故どうした事じやと遽てゝ來たが怪我いなかつたかや　登「ハイ何所もお怪我はムり升せぬイヤモウ夫は〳〵こはい男が三人連お菊様を手込にする所へ伊三郎さんが來て下さんして投散した其强さ私しや感心仕升たわいなア　龜「伊三郎殿よう來てやつて下さつたのう　伊「イヤモウ浮雲所でムり升た　登「申旦那様アへお歸り被成升せぬかへ　龜「さう仕升せう　登「伊三郎さんも御一所にお歸り成被るがようムり升るなア　伊「ヘイ

有難う厶り升るがまだ參詣を致し升せねば跡から參り升　藤「エ、つゝとモウ　登「そんなら
伊三郎さんは跡からなァ急度厶んせへ　熊「そんなら伊三郎殿　伊「旦那樣　登「サァ參り升せ
う〔ト向ふへ這入る〕　伊「今お登和さんが渡した此ゐ何が書てある知らん〔ト封を切る所へ
作十郎奴一人連出て〕　作十郎「若い者一寸物が尋ねたい此邊に大工職を致す金神の伊三郎と
申者〔ト顔見合せ〕　「ナ、其方は伊三郎ではないか　伊「誠に貴君樣と作十郎樣　作「先は堅
固で　伊「御息災で　作「重疊〳〵　伊「お目出度う存じ升　作「其方も知る通り御主人根岸肥前
守樣御病氣御大切と相成然る所所存あつて尋る者あれ共相知れず其方が助力頼さんと居宅
を尋ねんと存ずる折柄能き所で對面致した　伊「イヤ申旦那樣貴君樣が御自分に旅へお出被
成升は中々大事のれ尋者と見へ升がじたい夫は何で厶り升る　作「伊三郎必らず他言は無用
其尋る者と二重鶴の古金圍の切れを所持する者主命とは申なから雲よ礫の尋ね者推量の致
してくりやれ　伊「成程むつかしき尋ね者で厶り升が及ばずながら私もお行衛尋ね若し手掛
りが厶り升れば早速お知らせ申升　作「過分〳〵伊三郎吉左右を相待おるぞよ　伊「ハァ、
作「左らば〔ト向ふへ這入る上手より吉五郎熊五郎樣子を見て居る〕　伊「作十郎樣のお談し
では親の代かられ出入りの根岸樣のお家の大事こいつと一番帶締てお行衛尋ねにやならね
へわい　熊吉「カウさつきにやおいらの友達を能くぶつくじいれなァ　吉五郎「其返報に仕掛け

て來た相手になつて貰はうこのい　伊「夫じやさつきの仕返しだなさつきの奴等が悪ふざけを
仕やがるこら金神の伊三郎ぶちのめしたが夫がどうした　熊「どうもかうもねへ吉やぬか
るな〔ト合點だ〕　「ト色々立廻りある上手より藤三出て見て居るド〻両人橋掛りへ逃て這入
る」　伊「さまァ見やがれ○ドレ歸らうか　藤三「ナイ若い衆一寸待て貰ひ度い　伊「おらが事か
藤「さうよ　大工仲間の通り者　金神の伊三郎どん両面の藤三が呼掛た隙は取らねへ一寸待て
下んせ　伊「さうして用は　藤「外でもねへ立て〻貰ひたい　伊「そりや何を　藤「ハテおいらが
男を　伊「どうしたと　藤「今の奴等はおれが子分手込にされちやァ此藤三が顔が立ぬへどう
か立て〻貰ひ度い　伊「成程さうおとなしく出られちやァおいらの方も仕方がねへさうして
其仕樣は　藤「何むつかしい事はないおいらが前で両手を突き平謝りに謝るのさ　伊「否だ青
二瓶でも金神の伊三郎何がこはくて謝るのだ　藤「ヤイ金神假令手めへがどういつても此両
面が謝らすい　伊「何を猪虎才な〔ト色々立廻りト〻扳合し立廻る四郎太郎出て是を見て止
め〕　四郎太郎「兄分待ねへ伊三郎待て　両人「退け〳〵〳〵　四「イヤ一番待て貰ひ度い　藤「男を
磨く此出入り　伊「止立して怪我まくるな　藤「退けといつたら　両人「退け〳〵〳〵　四「イヤ
退のない男同士の出入りと見て止めに這入た四郎太郎邪魔になるなら此懸片附けた上逸引
仕ねへ　藤「スリヤ手前は出入りの道節を知つて止めるか但し又知らなけりやァ無駄な事

伊「事によつたらさへ人の仕舞を附けても此出入滅多に引ねへ　両人「退いた〳〵　四「仕舞を附けねへ　両「どうした　四「サア両面と金神の命を果す立引の爰眞中へ飛込んですぐ〳〵引たといはれては此後四郎太郎が口が利けねへだからすつぱり息の根をば止めて仕舞つてもらうかい　伊「デモさへ人のこんたをば　藤「片附けたといはれては　伊「どうも世間へ此顔が　四「譯も何にも知らねへで命を捨て貰ひに出た此栗柄の顔を一番立てくんなよ　伊「喧嘩は元より好まぬおいら兎やかういふのも氣が利かねへおいらも四郎太の顔立て　藤「手前さへ任かせるなら兄弟分のかいらが事意地張る心があるものか　四「引てくれるか有難い二人が心が揃つたら誰から先の差別はねへ両方一所に　三人「サア〳〵〳〵　四「能く引てくれた失でおいらが○イヤおいらの顔も立とといふもの　藤「後日にとうをる待て居ろ　四「そりや其時の又方便　伊「おいらも歸つて両面の仕掛て來るを待て居やうよ　両人「とこといふもの、　四「ヘテおいらじやねへか○〔ト藤太は上手伊三郎は向ふへ這入る「男達の達引のとあつたら命を○〔ト身顫ひをして「眞平ばなァ○〔ト伊三郎の落したる物を拾ひ「コリヤ何だ○チヤ濡物だな○〔ト口の内で讀で見て「夫じやァ今の伊三郎が小間物屋の娘と畜生め○〔ト床机に腰掛けると木の頭「味くやりやァがるなァ〔ト物を天窓へ冠る宜しく返し

造物平舞臺一面の板塀眞中に切戸口能き所に見越しの松都て小間物屋裏通りの体本釣にて道具留る〔ト下手より温飩屋上手より按摩出て捨臺詞にて温飩を喰ふ事あつて上下へ這入る向ふより四郎太郎出て」　四郎太郎「すつぱりと忘れて居たが兄分に借た七両の金是非今夜は返べす約束どうしたものであらうなァ○〔ト舞臺へ來る此前より犬一疋出て居て吼附く「忌々しい畜生だなァ〔ト石を投附けると切戸へ當る内よりお登和出て探り〳〵四郎太郎が手を捕らへ無理に切戸の内へ引張て這入る向ふより伊三郎出て舞臺へ來り切戸を一つ叩いて小隠れしても誰も出ぬ故又叩く　伊「どうしたのだチイお登和さん何して居るのだチイ〳〵○エヽ忌々しいエイ〔ト力いつぱい叩いて惚りして耳を押へると木頭又獨吟になる宜しく返し

造物二重襖通り床の間違ひ棚貼混ぜの唐紙上下落間植込み例の所切戸二重の前側一面の障子本釣鐘相方にて道具留る〔ト橋掛りよりお登和四郎太郎の手を引て無理に連て出て來り障子を明ける内に寐所の上にお菊寐間着にて居るお登和四郎太郎を此傍へ突やり下手へ這入る跡色々あつて行燈にかけある寐間着落る」　お菊「ヤ貴君は〔ト惚りして逃かける四郎太郎お菊の袖を持て」　四郎太郎「噂の高ひ小間物屋一人娘のお嬢さん飛だ拍子の間違ひで思はず爰へ引込まれ顔見て駈出すもねへもんだ身丈はす尺合ないがはゞつた物を腰に差し腕に彫つたる倶利加羅の四郎太郎と二つ名を取た因果の男の端くれお前もとつくり思案してい

丶返事を聞かしてもいゝじやないか〔ト お登和橋掛りより出て〕 登「ヤお前は 四「どうした と 登「違ふた〳〵 是ハ一向やくたいじや○〔ト お菊はお登和の袖を引きどうせうといふ思入〕「宜しうムり升る私にお任かせ被成升せ○扨今晩は大きに麁相致し升て何とも角ともいひ樣がムり升せぬ申アノ夫々御寮人樣のお兄樣が今では勘當同樣の身の上度々私を呼よおこし被成妹に逢ふて談しの仕度い事もあれば裏から忍んで今夜來る故切戸を叩くを合圖に明てくれと申され升ので合圖の拍子に手を引て連て這入て此しだらお腹も立升せうが御了簡被成て今夜の所は無事にお歸り被成て被下升せ 四「違つたもねへもんだ無闇に引込み長文句夫じやアさうかと此儘に如何な釋迦でも歸られねへ○タガ否がる者を無理往生も面白くねへ○カヲ姉御扱ひを出しなさい 登「エヽ 四「一寸來な○愧かしい事ながら親分に今日中になくちやならねへ金があつて其金の思案にくれて居るのだ是も何ぞの因緣じやと思つて其金を貸ておくんなせへ 登「夫は大方大枚のお金でムり升せう何をいふても夜中の事且那樣の寐間へは行かれずどうしたものであらうなア 四「何ろんな大層な事じやねへお愧かしいが七両斗りだ 登「夫程の事ならどうなとなり升せう〔ト お菊に呟く〕 菊「成程さういわしやんすりや氣の毒なれどお金といふては 四「ねへといふのか仕方がねへ○此臺詞附て來うよ 菊「アヽ申夫を爺樣に聞かれては 四「悪くば金を貸てくれるか 両人「サア〳〵 四「どちらなりと返事を仕ねへ〔ト お菊櫛を脱き〕 菊「是ではお氣に入るまいなれど 四「此櫛を貸ておくれかこいつは剛氣な代呂物だ 菊「必らず人に沙汰なしに 四「ナット承知ださつきよや飛だ敵役で嘸悔り仕なすつたであらう○ナヤ眞ッ暗だ 登「アヽ申其切戸を 四「眞直にし〳〵木の頭返し

造物元の板塀へ戻る獨吟にて道具納る〔ト 伊三郎居て〕 伊三郎「ナイ明てんろ○お登和め明さらさんかいェヽ忌々敷い〔ト 色々思入あつて叩て居る内より四郎太郎明けると伊三郎内へ轉び込む四郎太郎そつと出るを伊三郎顔を覗きに行く四郎太郎突退けると伊三郎ばつたり倒れる四郎太郎櫛を出を此とたんに月出る木頭四郎太郎櫛を透し見る是にて獨吟きつぱり宜しく幕

二幕目

両面藤三内の場
小間物屋内の場
同普請小家の場
地蔵堤殺しの場

役人替名

一金神伊三郎

一娘　お菊
一丁稚　定吉
一子分　熊五郎
一同　吉五郎
一同　傳治
一同　重吉
一同　市五郎
一同　權三
一大工　市五郎
一小間物屋龜右衛門
一番頭　重兵衛
一奴　關助
一信樂作十郎
一下女　お登和
一両面藤三
一俱利加羅四郎太郎

造物平舞臺襖通り押入納戸口鼠壁上手障子家体下手世話場例の所門口舞臺に市五郎吉五郎傳次重吉熊五郎酒を呑で居る山又山の鳴物にて幕明く〔ト内にて〕大勢「ヨヲ〳〵〳〵〔ト響める〕」市五郎「何だ騒々しいわい如何に稽古屋だといつてちつとは遠慮仕やァがれ　傳次「さうだ〳〵隣近所は堪つたものじやないわい　吉五郎「ぐず〳〵いふ事はねへ向ふの内へ踊込でやらうじやねへか　重吉「さうだ〳〵踊込め〳〵　熊五郎「べら坊め手めへ達がさつきから呑で居る此酒は何所から來たのだ　皆々「どう云たと　熊「隣りから今日はさらへ講を致升から宜し〳〵お頼み申升るといつて持て來た酒肴じやねへか　吉「夫じやァ此酒肴は　皆々「隣りから來たのか　熊「隣りから來た酒肴に喰ひ醉ひ踊込むもねへもんだ　吉「コリヤ大し〳〵じりだ　傳「ざまァ見やがれ　皆々「ハヽヽヽ〔ト向ふより藤三出ると跡より權三附て出て舞臺へ來て藤三「今歸つたよ　熊「チヽ親分　吉「手間が取れ升たね　藤「四郎太郎は歸つたか　熊「兄分は一昨日出たなりで歸らないが　市「下谷あたりに喰倒れて居るのだらう　傳「博奕は打たず女は嫌らひ酒を樂しみに暮らして居るとは　權「あれが誠の猩々の申子であらう　皆々「ハヽヽヽ　藤「べら坊め手前達もあんまり罵められた身持じやねへ　熊「夫見ろ直きに話しの尻馬に乘りやァがるのら叱られやァがるすつこんで居ろ〔ト向ふより四郎太郎出て〕　四郎太郎「一昨日内を出たなりで昨日氏神で兄貴に逢つても金の催促仕ないから却つて辛いが此代呂物をば兄貴に預けて三四日延して貰はう〔ト舞臺へ來り這入りにくき思入にて尻から這入りこのける」　熊「誰だ〳〵○兄貴じやねへか　藤「四郎太郎なぜ這入らねへ　四「敷居が高いから這入り兼て居るのだ　藤「馬鹿をいはずと這入りねへ　四「夫じやァ御免なせへ　藤「四郎太何所に居たのだ　熊「兄分は下谷邊で酒でも呑んでごろついて居たのであらうよ　白「べら坊め酒所じやねへ心配斗りして居たのだ　藤「本に素面だな酒さへ喉へ通らねへとはどういふ譯かいつて見ろ又相談相手になつてやるよ　白「其心配は外の事でもねへ面目ねへが日外借りた七両の金色々と工面を仕ても出來ねへから夫が誠よ心配でならねへが○〔ト櫛を出して「ど

うぞ此品を預つて爰四五日待つて下せへ　藤「ハ、、、何だい手前の氣の小さい何時でも工面の出來た時返すがい、○ふんな物い入らねへから取て置ねへ　四「イヤ夫じやァ氣が濟ませねへどうぞ預つて置てくんなせへ　藤「さういふ事なら手前の氣休めに預つて置う○〔ト紙包みを明けて見て「何だコリヤ櫛だな然も瑇瑁菊唐草の高蒔繪だな　熊「此櫛は見た樣な櫛だなァ　吉「コリヤ小間物屋の娘が昨日挿て居た櫛じやァねへか兄貴どうして手に入たのだへ○〔ト四郎太郎吉五郎の胸倉をとる「チイ〳〵兄貴どうする〳〵　四「どうするもねへものだ昨日首掛けした事を忘れやァがつたか　吉「違ひねへあの娘の事でか　四「夫だから首を取るのだ　吉「兄貴了簡して下せい〳〵誤た〳〵〔ト納戸口へ逃て這入る　四「カウ〳〵吉の野郎をつらまへて來てくれろ　皆々「合點だ〳〵〔ト皆々這入る」　藤「騷々しい奴等じやなァ○時に四郎太此櫛は小間物屋の娘の櫛に違ひねへか　自「何だなおつに念を入れるのは　藤「何あんまり不思議な　四「エ　藤「イヤい、代呂物だといふ事よ　自「夫でこんたが念入てハテなァ　藤「時に四郎太勝手に酒も肴もある一盃やるがい、　四「有難い御馳走になつて來やうか〔ト納戸へ這入る」　藤「フム○此櫛が四郎太の手へ這入る筈がねへどうも不思議だ　熊「若しや是ではあるまいの　藤「何にしろ此櫛を玉にしてカウ〔ト呵〕　熊「成程味い　藤「エ、靜にしろ○手めへ吉の野郎を連れて　熊「アノ酒と魚を　藤「早くしろ　熊「合點だ吉や〳〵

吉五郎「何だ〳〵〔ト納戸より出る上手家体より四郎太郎聞て居る」　熊「早く來や　吉「何所へ行〳〵のだ　熊「何所でもい、から附て來るがい〳〵　藤「カウ〳〵上下を忘れな　熊「合點だ　吉「さつぱりと分らねへ〔ト兩人橋掛りへ這入る」　藤「カウツと○誰ぞ居ないか　四「チイ〳〵○〔ト出て「兄貴用ならおいらが仕樣か〔ト藤三ぎつくりして　藤「此用は手前では　四「出來なからう其櫛を玉に使つて小間物屋へ仕事に行くのか　藤「ヤ　四「兄貴そいつは悪い思附だせ○其櫛を玉にして仕事をされてはおいらの顏は何所で立つ情で借りた代呂物をかたりの囮に使をたら恩を仇で返る道理此迄度々して來た悪事人い知らぬと思つても此四郎太郎は知つて居る此上悪事で骸をば三尺高い木の空へ上た時は數多ある子分の者の顏よごしぞうぞ眞人間になつて下さい頼むわいのう〳〵　藤「能くいつてくれたおいらの樣な悪黨者を兄弟分だと思へばこそ手めへの意見有難い今日から眞人間になるのら案じてくれるな　四「あんまり早ひ往生際　藤「何両面も男の端だ　四「其詞でおいらも安心　藤「夫じや奥で一盃やつて　四「い、夢でも見るがい、○〔ト藤三納戸へ這入る「生れ附とはいひながら餘ッ程根强い悪黨だなァ〔ト向ふより作十郎關助出て」　作十郎「伊三郎が申參りし両面が宅は偖にあれ關助案内致せ　關助「チイ○〔ト舞臺へ來て「ちと物が尋ね度い両面藤三が宅は是か　四「ヘイ免るしやれ○其方は両面藤三と申者か　四「イヤ私は藤三が弟分四郎太郎と申者でムり升る　關「

四郎太郎に相違なくば腕廻せ　四「コリヤ理不尽に何と被成升る　作「子細も申さず只今のしざ驚くい尤某こそは根岸肥前守が家臣信樂作十郎と申者汝が所持致す守袋を見分致したい　四「ハテなァ替つた事をお望み被成升る則是が私の守袋　作「此守袋は餘人より受けたか　四「其守は母の譲り肌身離さず大事に掛けており升る　作「然らば猶以て尋る子細ありサァ某と同道にて根岸殿の屋敷迄　四「お供致し升せうがどうぞ縄だけ御宥免を　作「如何樣尤關助心を附て同道致せ　関「心得升た○四郎太郎お立ちやれ　四「ヘイ御苦勞樣でムり升〔ト三人向ふへ這入る藤三納戸よりツカ〳〵と出て向ふを見て居る橋掛りより吉五郎熊五郎塗樽白臺に鯛を乘せ麻上下を持ち出て是も向ふを見て」　両人「親分　藤「ろんから矢ッ張四郎太めは　両人「いがみと見へるな　藤「さうかも知れねへ　熊「親分言附の代呂物は手まへて來た　藤「支度しろ　両人「合點だ〔ト熊五郎上を着せ吉五郎袴の腰板を前へやる〕　藤「エヽべら坊め○〔ト袴を引たくるが木の頭〔氣を附けろ〔ト是にて宜しく返し

造物二重襖通り店戸棚是に小間物を並らべある上手襖納戸口押入下の方中庭暖簾かけあり下は小間物を飾り欄間に横暖簾掛けあり都て小間物屋の飾附け二重下手に忠七帳合を仕て居る定吉箕盆の掃除仕て居るお菊市松人形を持ちお登和市松の着物を縫て居る三味線入りの通り神樂にて道具納る　忠七「定吉早う掃除を仕舞はぬかい　定吉「其樣にいふたとてたんとの箕盆の掃除が早うなるものかいなァ　忠「又口答へさらすうどつくぞよ　お登和「アヽコレ忠七さんモウよいわいなァ定吉どん早う仕て仕舞はしやんせいなァ　定「アイ〳〵　忠「申御寮人樣市松所か追附け本間の市松を抱かねばなり升せぬ　お菊「私は嫁入は仕はせぬ故やゝを儲ける事はないわいなァ　忠「何をおつしやり升る下谷の上総屋樣のお嫁御樣ヨウ〳〵花嫁御〳〵　菊「アレお登和あんな事をいふわいのう　登「ハテ大事ムり升せぬ私が嫁入はさせ升せぬわいなァ　忠「夫でもモウ約束が　登「エヽモ默つて居ておくれいなァ　忠「ヘイ〳〵〔ト向ふより伊三郎跡より市五郎松板を二三枚かたげ出て來り　伊三郎「市公大層遲くなつたせ　市五郎「忌々しいとうへんぼくを相手にしては仕舞が附かねへ　伊「又手代の雷めが喧しくいやァかるせ　市「あいつも忌々しい奴たせ　伊「サァ行う〔ト舞臺へ來て「ヘイ只今歸り升た　忠「ヘイ〳〵伊三郎材木屋へ往て何時迄かゝつて居るのじやさう隙取ては仕事する間がないといふものじや　伊「ヘイ先の材木屋の番頭がべら坊だから夫で遲くなり升た　市「お前さんの樣にいつたとて仕方がムり升せんわな　忠「斯ういふのはおれが職分じや一日雇つた人じやもの仕事が出來ねばいはにやなり升せぬわい　市「假令どうして居ても仕事は仕て見せるあんまり囈言つきやァがるな　伊「カウ〳〵お得意樣を相手にしてはこつちが負けだ默つて居ねへ○ヘイ忠七さん何分此男が氣早いから御了簡被成て被下升せサァ市公仕事ゑ

かゝらうか 市「さう仕様よ 登「ア、コレ伊三さんお前に一寸 伊「止してもれくれ人を嬲る も程があるはな 菊「ア、コレ申 伊「へン知らねへよ」ト両人中庭へ這入る」 菊「ね登和アレ あの様な 登「ア、申何にもおつしやり升なよい思案がムり升れば私と一所にお出被成升せ いなア」ト両人奥へ這入る」 忠「何の事じや根つから譯が分らぬ」ト向ふより吉五郎熊五郎 樽肴を持ち跡より藤三上下を着て出て舞臺へ來て」 両人「サア聟様だ〳〵 忠「エ、何じや聟 様じや 藤三「聟様が來たのになぜ鼻殿はなぜ出ないのだ 忠「さうして誰の聟に 吉「べら坊 め爰の娘のお菊の聟 熊「日がいゞから押かけての聟入だ 忠「私では譯が分り升せぬ○申旦 那様〳〵聲様とやらが見へ升た」ト奥より龜右衛門出て」 龜右衛門「聟とは何の事じや 吉「何 の事もねへ 熊「祝言の用意しろ〳〵 龜「コレ〳〵お二人さうして聟様といふお人は 藤「お とつさん其聟殿は爰に飼れており升はな 龜「ツイぞ見た事もないお人様 藤「お初にお目に かゝり升る私は両國幸町に住居升る両面藤三といふ未熟者不思議な御縁で御厄介になり升 る 龜「是は御挨拶ではムり升るがいつこう此方に覺へのない事合點の參り升せぬ 藤「ナイ 〳〵親仁さん親の心で何時迄も子供の様に思つて居ても十六七の色事盛りおめへの手前は 濟まねへがそつちもこつちも深い縁仕方がねへと諦めて結納代りの樽肴どうぞ納めておく んなせへ 龜「成程さういはれるとどうやら娘と譯のある様子娘に逢はして其上で覺へがあ れは兎も角もコレ忠七娘を 忠「ハイ畏り升た○サア〳〵御寮人様ちやつとお出被成升せ」ト お登和お菊を連れて出る」 龜「コレ娘其方がいひかはした男じやといふて聟入よムつたが 其方に限つて其様な事の有様な筈がないがマアあのお人をとつくりと見たがよい 菊「お登和 旦那様とした事が何をおつしやり升やらろんな事があつてよいもので厶り升せうぞ私が見 たらつい知れ升る○ヤお前は藤三殿 藤「誠に手前は 登「ナヽ良人しやコレお前はなア 藤「 ヤイ〳〵知らねへぞ〳〵エヽ知らねへわい 登「本に惚れるわいなアマアろんな事が能うい はれたものじやわいなア 龜「コレお登和わが身は知つて居やるか 登「ハイ知つて居る段じ やムり升せぬ三年前に科もない私を置去にしてとんと行衛が知れ升せぬ故是非なうお内へ 御奉公に參り升たのでムり升る夫にマアろらさうにお菊様の聟様じやと本にあきれて物が いはれぬわいなアコレ一体私には何の科があつて置去にしたのじやサア聞升せう〳〵 藤「 エヽ喧しいわい引さかれめが 忠「ろんならお登和どんの御亭主か 藤「イヤ知らねへ誰が 何といつてもお菊といひかはしたといふには慥な證據がこつちにあるのだ○サア證據とい ふい此櫛だ 菊「ヤ其櫛は 藤「どうだ覺へがあるだらう瑇瑁の其櫛に菊唐草の高蒔繪一つ夜 着二つ枕でしつぽりと寐た其上の筐にと渡して呉た此櫛は起證代りの大事の代呂物サア 親仁さん是でも聟よなられないのか 龜「夫じやといふて 藤「お菊と祝言させる氣か 両人「サ

ア〳〵〳〵 藤「親仁返事はどうするのだ 伊三郎「イヤ其祝言一寸待て貰はうかい」ト奥より手斧を持て出る」藤「さういふ手前ハ金神の 熊「伊三郎の野郎だな 伊「昨日初めて氏宮で出會た藤三が聟入りとは新らしう出掛て來たな 藤「此両面が仕掛けた祝言待てと止めたは樣子があるか 伊「手前の命は伊三郎が貰つたから覺悟しろ 藤「何おれが命を貰つたとは 伊「ハテ知れた事間男だから 藤「どうしたと 伊「青二歳でも金神が嘴を手前に取られては男が立ねへ 藤「おつに出て來た此場の達引夫じやァお菊はお主しの 伊「元は互ひの淫奔から旦那に貰つた女房のお菊夫に手前が聟入とはいはずと知れた隱し男重ねて置て四つよせにやア金神の顔が立ねへ 藤「ハヽヽヽ顔の賣れた両面が間男をしていヽものかわいらの心に引比らべ盗喰喰する男じやねへわい 伊「其潔白の男の口から一つ夜着二つ枕でしつぽりとはどうしていつた 藤「ヤ 伊「餘も知らぬとはいはれまい 登「さうでムんす私をば置去にして悪性の仕度い三昧まだ其上に御寮人樣に惚れくさつてあた憎てらしい 藤「エヽ腐り女郎めすつこんで居ろ 登「誰がすつこんで居るものか三年越しに腹の立たを一時にいひ升る置去にした譯を聞くのじやわいなァ 藤「さうだ〳〵言て聞くがいひ〳〵 登「アイ聞かいでかいなァサァいはしやんせ〳〵 藤「ヤイ悋氣仕やァがるも場所があるわいうぬどつきのめして 伊「カウ〳〵親分高が夫婦中じやねへかモウ止しねへ〳〵○夫婦喧嘩は内證の事おいらの出入はどう仕舞を附ける氣か 藤「サアおれの言條を立やうとすれば間男といはれた時ハ男が立ねへ此儘歸れば子分の者に此顔が〔ト重兵衛奥より覗て居て 重兵衛「イヤ其お顔は私が立升るでムり升る 藤「さういふ手前ハ 重「ヘイ私は當家の番頭重兵衛及はずながら私がお顔の立樣致し升せう程に先今日の所はお歸り被成て被下升せ 藤「成程番頭さん程あつてどうやら譯も分りさうだ○ようムり升るれ前に任して歸り升せうよ 重「さうして貴君のお所は 藤「幸町の二丁目で 重「両面藤三と尋ねて來おせへ 重「暮方迄に急度お返事 藤「待て居るせ 登「アイ待て居て下さんせ私も尋ねて行升ぞへ 藤「お多福め止しやァがれ○番頭さん頼み升よ〔ト三人向ふへ這入る」重「伊三郎殿御苦勞でムつたなァ 親「よい所へ出て下さつて事なう濟で悦び升る 伊「イヤモウ飛でもねへ奴が來やァがつて御心配でムり升せう 登「申旦那樣あんな無体をいひかけて來てからに本に面の憎ひ奴ではムり升せぬか 伊「チイ〳〵お登和どんロと心は裏表といふのであらうよハヽヽヽ○時に旦那樣今の場所の間に合にお菊樣を嗅の何のと口から出たらめをいひ升た御免被成て被下升せ 重「あの樣にいはしやつたので藤三も理詰で歸つたのじや 親「夫はさうとどうしてマァ娘の櫛をあの藤三が持て居たであらうのう 菊「本よマァあの櫛がどうして今の人の手へ 登「アヽ申何にもおつしやり升なへ 伊「つまらねへ奴にかゝつて仕事の際さへドレかゝり升せう 親「マァゆつく

りと休んで下され　伊「イエ〳〵仕事と出かけ升せう」〔ト這入る　龜「コレお登和娘も嘸心使ひしたであらう合藥でも呑せてやつて〳〵れ　登「ハイ〳〵サアお出被成升せ」〔ト両人奥へ這入る　重「コレ忠七殿横町の田島屋へ櫛笄を見せてある程に聞て來て下され　忠「畏り升た」〔ト橋掛りへ這入る」重「旦那様お菊様もモウお嫁入り盛り何時迄もお傍に置かしやり升るとお爲にはなり升せぬ既に以て今日のしぎお前様には何と思召升るぞ　龜「成程娘にも談合はして居れど嘸が死でから爺親育の氣隨氣儘〳〵どういふたら突詰た氣で若しもの事でもあらうかと一日延しに捨て置たが諸事はこなたに頼み升る　重「イヤモウ親御様のお心ではお案事被成升るは御尤ではムり升れど私が悪い様には致し升せぬお心安う思ふてお出被成升せ　龜「ア、番頭殿子は三界の架奥じやわいのう」〔ト奥へ這入る」重「おいとしやお年寄りの心使ひ是に附ても兄御の龜太郎様何所にどうしてムるやらお心が直つたら定めて旦那もお悦びであらうもの儘にならぬは浮世とはア、能ういふた○〔ト是にて木の頭「事じやなア〔ト宜し〳〵誂らへの鳴物にて返し

造物平舞臺一面の板塀上手九尺の數奇屋下手に路次口都て奥庭の飾附け伊三郎板を削り市五郎丸太に穴をはつて居る賑かな唄にて道具納る　市五郎「カウ伊三さん何だか剛勢に威張る奴等だから飛で出やうと思つたがとう〳〵負けて歸りやアがつたねへ　伊三郎「さうよあんな奴が多いからお上みに御苦勞が絶へねへのだ」〔ト數奇屋へお登和お菊出てお菊紙を丸めて投ると市五郎に當る」市「チヤ誰だへ笑談しやアがるな　伊「市公どうしたのだ　市「仕事をして居る者よこんな紙を打附けやアがつて○何だかい〳〵香ひのする紙だ何所から投り附けたらう　伊「ドレ見せねへ○違ひねへこんな紙を投り附るは○〔ト お菊と顔見合せ悪いといふ事をして「ア、コリヤ大方天から降つたのであらう　市「馬鹿をいひなせへ天から紙が降つてい〳〵ものか降つたら雷の嘸が小便でも仕たのだらう○〔ト お菊を見て一ろりや雷だ桑原〳〵〔ト こけら屑を投る」　伊「何をするのだ〳〵　市「夫でも紙を投た雷が落て來たもの　伊「止しねへ〳〵大事の娘御様がこけら屑だらけになるはな　登「伊三さん旦那様が一寸茶の間迄來てくれといふてゝムり升たぞへ　伊「夫じやア行かずばなるまい　市「どつこいお前がいつちやアおいらの仕事が分らねへ　伊「丸太の穴をはつてくんな　市「ろりやモウはつて仕舞つた　伊「夫じやア此外にある杉皮を削つてくんなせへ　市「今は紙たが今度は臍でも降らねばいゝが〔ト路次口へ這入る」　伊「ドレ一寸往つて來うか　登「お前何所へ行かゝやんす旦那は爰にムるわいなア〔ト お菊を傍へ突遣る」お菊「伊三郎さん　伊「御用の旦那はお菊様かへ　登「ハイなア　伊「おつな旦那の御用だな　菊「申伊三郎さんひよんな事の間違ひでお腹も立うが堪忍して下さんせへ　伊「何間抜けな野郎だからお好にして下さり升せ　菊「アレお

登和あの樣に腹立て居やしやんすといなァ　登「是はしたり伊三郎さんありやお菊樣が悪いのじやない皆私が悪う厶んした堪忍して下さんせお菊樣は其事斗り案じて私をせがみ詰て れ前に斷りをいふてくれいと苦に病んでれ出被成升るどうぞ機嫌直して被下升せ私が一生の頼みで厶んすわいなァ　伊「さういはれると仕方がねへ樣なものだ　登「ソレお菊樣ちやつと傍へ行しやり升せ　菊「モウ腹立てではないのへ　伊「腹が立てもお前の事どうでも仕方がないといふもの　菊「堪忍して下さんせへ　伊「どうでもいゝはな　菊「嬉しう厶んす〔ト市五郎路次より〕　市「万歳樂〳〵〔ト走り出る〕　三人「エヽ悔りするわいなァ　市「カウお前よりれいらが悔りするのだ伊三さん悔り次手にれ前の兄貴の所から手紙が來たぞへ　伊「何だ手紙が來たさうして使は　市「往つて仕舞つた　伊「呼んでくんねへ　市「ナット合點だ〔ト走り這入る伊三郎手紙を讀で　伊「コリヤ兄貴に逢はなくちやァ分らねへお登和さん市公が來たら今石村へ往つて兄貴に逢つて直ぐに歸るといつて被下升せ　菊「アヽ申まだ用があるわいなァ　登「一寸待て上げて下さんせ　伊「其所どころか飛だ事が出來て來たわい〔ト向ふへ走り這入る〕　菊「アヽコレ待て下さんせ〔ト花道へ行かける〕　登「申お前さん何所へ行のじやぞいなァ　菊「サア伊三郎さんに談さねばならぬ事がある故私しや行わいのう　登「滅相な事おつしやり升せお前樣を一人やつてたまるもので厶り升せうぞ　菊「一人行く事があらぬ

あら連れて往てたもひのう　登「又ろんな無理をおつしやり升る二人が内を出升たら旦那樣にお目玉を貰はにやあり升せぬヲヽこわ〳〵伊三郎さんか戻つて來て寛りれ談し被成升せ○〔ト是にてかぶりを振て泣て居る〕　市「あんまり無理をおつしやるとやいとをすへ升ぞへ○阿るものゝ其樣に思ふて厶るのを阿つて病氣でも起つては却つて旦那樣のお心使ひ儘よ○申連れて往て上げ升せう　菊「エヽ嬉しいわいのうれ登和大明神樣〳〵〳〵〔ト手を合はしておがむ〕　登「エヽ置て被下升せまだ佛にはなり升せぬわいなァ　菊「サア早う來てたも〔ト手を引張るお登和躓いて下駄の鼻緒切れる　登「ソレ見なされ其樣に仕なさる故鼻緒が切れ升た一寸履替へて○イヤ〳〵顔見せたら旦那樣が用があらうも知れぬ儘よすげ〳〵往てこまさうサアれ○被成升せ〔ト誂らへの鳴物にて両人向ふへ這入る是にて返し

造物平舞臺眞中に辻堂上下藪壁後ろ黒幕松の釣枝本釣鐘相方にて道具納る〔ト橋掛りより忠七弓張提灯を持て出て〕　忠七「一体何所へ往た知らんれ登和どんと二人見へぬが何じや氣味の悪い所じやなァ〔ト上手より藤三頬冠して出て行違ひ　藤「チイ〳〵其所へ行くは小間物屋の手代じやねへか　忠「ヘイ左樣で厶り升る　藤「おいらは今日手前の内へ往つた両面藤三だ〔ト頬冠りを取る〕　忠「エヽ本に藤三樣じや　藤「手前の所の番頭が日暮迄に來る引合だがなぜ來ない手前知らねへのか　忠「ヘイ左樣で厶り升る　藤「打ちやつて

置きやァかると手前の方に目論見でもあつての事か　忠「へイ左様でムり升る　藤「彌さうゥ
忠「へイ左様でムり升る　藤「どうだ　忠「へイ左様でムり升る　藤「置きやァがれ何をいつても
左様〳〵と譯が分らねへとうへんぼくめ〔ト横面をはる〕　忠「人殺しじや〔ト逃かけるを
蹴上げる忠七目をまはし倒れる　藤「何だくたばつたか〔ト足音する故藤三辻堂へ隱れる向
ふよりお登和れ菊出る」　お登和「お菊様何と遠い所でムり升せうがな　お菊「お登和まだかい
のう　登「まだ半分道も來や致し升せぬ　菊「夫でもしんどうてならぬわいのう　登「爰からし
んとうては中々今石村迄往このるゝ事ではムり升せぬ夜が更ると悪うムり升る早うれ出被成
升せ〔ト舞臺へ來る藤三辻堂の戸を明け　藤「チイ〳〵待ねへ○ハテ待ねへといふに　登「私
共は使ひがけで何にも持てはおり升せぬ御免被成て被下升せ　藤「ハヽヽべら坊めうぬが
腹へ乘せた男の聲を聞忘れるもねへもんだ　登「本にお前は良人私しや盗人かと思ふて恟り
したわいおァコレ藤三殿御寮人様が今石村迄お出被成るれ前送つて來て下さんせ　藤「馬鹿
いやァがれ其娘には用があるから爰に置てうぬは歸れ　菊「コレれ登和どつちへも往てたも
るなや　登「大事の〳〵お前様を何の置て參り升せうコレ藤三殿れ前はお菊様に何の用がム
んすへ　藤「外じやァねへ抱て寐るのじや　登「コレ藤三殿れ前はなァ〳〵ようも其様な厚か
ましい事がいはれたものじや私がおり升せぬあた阿房らしい○〔ト藤三お菊の手を捕らへ
て行かけるをお登和後ろより捕らへる藤三ヒロにて後ろ突きにつく「コリヤ私を殺すのじ
やな假令死んでもお菊様をお前の自由にさすものか　藤「エヽ邪魔せずとくたばりおれ○〔
ト色々立廻りあつてお登和の肩先を突くお菊逃げかけるを足で踏まへて「サア此阿魔がい
ゝ手本命が惜しくば抱れて寐るか　菊「サア夫は　登「私に構はず早う逃て被下升せ　藤「エヽ
面倒な○〔ト又立廻りあつてお菊を突くと倒れるお登和を突殺し止めを刺し「エヽ仕舞つ
た手が廻つたお惜しい者だがうぬもくたばれ〔ト又お菊と立廻りあつてトゞ殺して止めを
刺すコト〳〵におる藤三小隱れをる向ふより伊三郎上手より伊八提灯を持ち走り出て行當
り」　伊三郎「兄貴か　伊八「チヽ伊三郎か今れ前の所へ行うと出て來た所だ　伊「私もお前の手
紙を見て○何だ大層な血だぞへ　伊八「ヤ人が殺してあるわい　伊「あに〔ト提灯よて見かけ
ると藤三提灯を叩き落す是にて三人急度なると後ろの黒幕を切て落し野面の遠見になる是
より闘闘色々あつて伊三郎は本花道伊八は通ひ花道へ行く」　藤「泥坊め〔ト伊三郎石を打附
ける藤三すかして向ふを見るが木の頭両人向ふへ走り這入る藤三提灯を透し見る誂らへの
鳴物にて宜しく幕

三幕目　百姓伊八内の場

役人替名

一女　居　お　徳　　一百　姓　伊　八
一庄　屋　茂　治　兵　衛　　一両　面　藤　三
一信　樂　小　文　治　　一百　姓　二　人
一娘　お　糸　　一四ケ所　大　勢

○三十

遊物平舞臺向ふ赤壁納戸口押入上手障子家体下手世話場例の所門口幕の内よりお徳仕立物をして居る百姓二人莨を喫で居る此見得宜しく幕開く　○「お徳殿伊八殿はまだ畑から戻らずでムんすか　お徳「ハイ今日はお辨を持て行しやんしたわいなァ　□「ろくい精分でムるなァ　○「伊八殿に負てはならぬ畑へ往てやらうじやないろ　□「さう仕升せう〳〵」〔ト両人橋掛りへ這入る向ふより庄屋茂治兵衛出て來り」　茂治兵衛「お徳殿内にか　徳「チヽお庄家様サアお莨お上り被成て被下升せ　茂「イヤ構はしやるな時に伊八は畑へ往たかな　徳「ハイ左様でムり升る　茂「夕べ地蔵堤で三人迄殺してあつた所が其傍ゑ草履が片足落てあつたじや其草履に伊の字の燒印が押てある其様な掛り合になつてはならぬ故何所の村も共詮議せいと代官からの言附じや故伊の字の附く者を呼寄せて吟味をせうと思ふて寄り升たのじやわいのう　徳「ろんなら地蔵堤で夕べの事でムり升たかへ　茂「チイのう　徳「合點の行かぬ　茂「ヤ徳「イヤ戻られ升たらお内へ參る様に申升せう　茂「さうして下され常から伊八が正直疑ふ事かないけれど代官からの言附けなれば戻つたら早う來る様にいふて下されや　徳「ハイ〳〵畏り升た　茂「左らばでムるぞや　淨「るり「曲まぬ道を眞直に我家へこそは歸りけり跡ゑお徳は物思ひ若しやと思ふて夫の身を案じ廻して獨言　徳「餘もやとは思へども伊八殿の夕べの歸り色青醒てさんばら髪案じらるゝは着物の裾に附てあつたは慥に血汐若しや金が出來ぬ故無分別でも出しはせまいか　淨「案事に胸も解けやらぬ人の歎きは身の幸ひ曲る大道大股に來かゝる両面藤三郎　藤三「れ徳どん久しいなァ　淨「ずつと這入るをお徳は見るより　徳「チヽ藤三さんお變りも厶り升せぬか　淨「何氣なければ素知らぬ顔　藤「さうして伊八は留守でどんすか　徳「ハイ畑へ往てまだ戻り升せぬわいなァ　藤「伊八が留守ならお徳さんこなさんに用がある　徳「用とは何でムんすへ　淨「いふ顔じつと打詠め　藤「見れば見る程いゝ女だアノ爰お命取りめが　徳「アレ藤三さん何じやぞいなァ　藤「イヤろくいものじや耳へ這入りや悪いとの心使ひ是程思ふ男の首が明日になればなくあるとは氣の毒な者だなァ　淨「と両面が問はず語りも夫の事合點行かねば聞咎め　徳「申藤三さん良人の首がないとは　藤「人殺しの科人だ　徳「エヽヽ　藤「どうだ首がねへといつたおらが嘘じやァあるめへかな　淨「といふも詞の工みの穴語ると知らぬ女氣に藤三の傍へ摺寄て　徳「何の良人に限つて其様な　藤「ソレ其所が女の淺謀だ爰の伊八が本町の小間物屋の

お菊といふ娘が金を持つて居るを知つて娘は元より下女といひ下男迄打殺したのだ　德「藤三さん惡口も事に寄る夫には何ぞ證據でも　藤「證據のねへ事いふものか○　淨「懷より取出す二品「サア見ろ此提灯に此草履同じ印の丸に伊の字血の附たるが慥お證據　德「エ、、、淨「エ、と惚りうろ〳〵と何と詞もなかりける藤三郎は空嘯き　藤「委しう知つたはおいらばつかりドレ一寸御番所へ　德「お前は訴人に行く心じやな　藤「マアろんなものかい夫とも爰が相談づくおいらの儘になるならば訴人は扨置きいやしねへ否だといへば戀の仇厄病神で敵討だ　淨「と詞の罠引掛られて女氣の心に當る最前の噂斗りか今目前扳差ならぬ證據の草履扱は夫は人殺しかと驚く胸を押鎮め　德「申藤三さん私の樣な不束者を其樣に思ふて下さんすか　藤「知れた事手前さへ得心あれは今から直ぐにおれが女房　德「お前がさういふ心なら良人が戻つたら暇狀取つて見せ升せうわいなア　淨「はつかりいとれて両面は乘かけられて　藤「ろんなら手附けに○といはせて置て後にといふは古いやつさ　德「本にマア疑ひ深い否か應かの私が心中○　淨「いひつゝ引出す針差の内より取出す剃刀で我と我手に我子指ふつゝと切て　德「アイタ、、、　藤「どうした〳〵○　藤「ソレ着物が血だらけになるはさ　德「イエコリヤ私が差替なれば大事ないわいなア○サア是を取て置て下さんせ　淨「差出す子指藤三は取て打詠め　藤「スリヤ指迄切つて○仇には仕ねへ守りにするよ　淨「押頂いて懷へ入れる其間にお德が機轉手早く二品取るより早く井戸へざんぶと投込めば　藤「大事の證據をなぜ井戸へ投込たのだ　德「ホ、、、あんな物がなぜ大事でムんす女房にあれば訴人いせぬといはしやんしたではムんせぬか　藤「ヤ　德「モウ追附良人が歸らしやんすに違ひない得心さすを奥で見て居て下さんせいなア　淨「いへば藤三が心の笑み返事を松葉の莨盆提て一間へ入る跡はお德は一人物思ひ餘もやと思へど證據の二品欺しすかして取たれども若しやと女の胸細き野道を歸る親子連れ　伊八「コリヤ娘今日は一日畑に居て退屈にあつたであらう　お糸「イエ〳〵面白うつたわいおア　伊「早ういんで嘘に貫を貰らへ〳〵○〔ト門口へ來て「お德今戻つたぞよ　德「ヲ、良人きつう早かつたおアお糸褒美をやり升せう○　淨「針差の中より取出す巾着はほんそ娘の褒美かや「申良人ちつと尋ねたい事がムんすが夕べ何所へ行かしやんした　伊「ハテ伊三郎に逢ひに往たのじや　德「サア其逢ひに行かしやんしたお前の戻り髪乙乱れ色眞ッ青ありやどうした事でムんそたへ　淨「問かけられて　伊「成程合點の行かぬは尤マア聞てくれ知つての通り金の才覺弟に逢ふと思ひ内を出て地藏堤へ往た所が弟に出逢ふた故談しをせうと思ふ内殺してあつた人の死骸見るより惚り走つて戻つたマア世の中には惡い奴もあるものじやなア　淨「いふ顔じつと打詠め　德「申良人人間は老少不定ひよつと私が死たなら此子を餘所へやらしやんすか　伊「何じやい今日に限つて色々な事

をいふなァ假令乞食をする迚も他人にやつてよいものかい　淨「眞實誠の詞の端飛立つ程の嬉しさを胸に納めて思案を定め　德「申良人私はお前に賴みがあるどうぞ去狀書て下さんせ　淨「藪から棒の詞の端合點の行かぬ伊八より　一間よ藤三かしたり顏　伊八はお德を引寄せて　伊「コリヤやい嘘わりや何をいふのじやれりやとんと合點が行かぬ其譯をいへ　其譯を　德「お前も能う思ふて下さんせお前は骸は惡るし人並には作も出來ず所詮末の見通しが附かぬ故私しや是から程よい所へ取附て樂をせねばならぬわいなァ　淨「口は立派に心にはお身の罪に此身を代へる覺悟と知らぬ夫疊叩いて　伊「ヤイおれは兎も角此娘が可愛い事はないかい此子を捨ておのれ斗りがゑい身になつて夫で樂じやと思ふて居るかコリヤわれが樣な者は畜生じや望みの通り暇をくれた此子は女こいつも連れて出てうせい○といひたいがおりや此娘はようやらぬわい　淨「娘を抱しめ〳〵てわつと斗りに泣夫の心を汲んで尤といひたさつらさ悲しさをこらゆる胸の四苦八苦とは知らすして子心に　糸「コレ爺樣もか〻樣もモウせり合はすと中ようして下さり升せいなァ拜み升る　淨「と手を合はしあつちこつちを拜む子を見るに悲しさ母親が心はさうじやないじやくり　德「コレ娘此か〻さんと一所に往たらどんな憂目に○イヤ何所へ嫁入するにも其方があつては邪魔になる程に爺樣の傍に居て孝行してたもや　糸「アイ　德「何をいふてもアイ〳〵とこんな可愛い子を捨て　淨「遠い所へ行く母の心を推量してたもといはれぬ胸の苦しさを知らぬ伊八が娘を引分け　伊「ヤイおのれが傍に置くと此娘迄畜生になるわい暇くれたら出てうせい　德「能ういふて下さんした暇の出た內に居樣より早う往て身の片附けをせにやならぬドレ出て行く用意を仕升せう　淨「いひ捨立は立ながら夫や娘の顏形是が此世の見納めと思へば先立涙をば隱して納戸へ入にげり　糸「の〻樣いのう○コレ爺樣あのか〻樣が行ろしやんすと明日からは髮結たりべ〻着せて貰ふか〻樣がないどうぞ行かしやらぬ樣に詫言して下されいのう　淨「泣出す娘を抱か〻へ　伊「ナ〻道理じや〳〵尤じやはやい　淨「我を忘れて男泣き理り過て道理なり斯る所へ所の代官信樂小文治手の者引連れ門口より　小文治「ろりや　四ケ所「ハア〻動くな　淨「捕た〳〵と取卷たり伊八い惚り手をつかへ　伊「コリヤ何事でムり升る　小「ヤアとぼけまい夜前地藏堤にて人を殺した大罪人訴人あつて慥に聞くサア尋常に縄かゝれ　伊「ア〻申お代官樣私は人を殺した覺へはムり升せぬシテ其訴人と申升るは　藤「イヤ外でもねへおれだ　淨「聲をかけ一間を出る藤三の顏合點行かずと打見やり　伊「こおたは藤三殿此伊八が人を殺したとは何を證據に訴人をした　藤「伊八此草履知つて居るか　淨「腰より出す片足の草履伊八が前へ投り出せば不思議さうに手に取揚げ　伊「コリヤ是おれが草履此草履が證據とは　藤「夕べ地藏堤を通りし所提打消て逃行く曲者其時殘りし草履の片足血の附たるが慥な證據　伊「コレ藤三

殿其草履は藪際で死骸を見た時思はずも脱て逃げたるおれの草履　藤「幾ら手前が言脱けてもおいらの方にハ證據がある手前の方に覺へのない證據があるか　伊「ヤ　藤「人殺しに違ひねへか　藤「サア　両人「サア〳〵　藤「返事はどうだ　淨「返答納戸の内よりもお德は駈出て　お德「其科人は私じやわいなア　藤「ハヽヽヽ何の女子が人を殺さう○コリヤ何か伊八が科を身に引受ける積りだらうモウいかねへ夫共何ぞ　德「サア證據といふは自身の白狀また其上に此着物に血の附たのか偽な證據身のいたづらから金の入る事かあつて小間物屋の娘御が金を持て居やしやんすと聞た故殺したは出來心サア繩掛けて被下升せ　淨「誠しやかに夫の罪我身に負ふて覺悟の体伊八は引退け　伊「何のわれが知つた事か何でも是は人違ひ　藤「べら坊め手前が殺した證據の草履　德「サア其草履も私が履いて行升た私が殺したに相違はムり升せぬ　伊「コリヤ嘆そりや何をいふのじやわれが捕はれて往たら此娘は誰を便りに　德「アヽコレ科人に縁があれば掛り合ひ暇を取たら夫でも子でもムんせぬお前の搆ふ事はないわいなア　淨「思ひ切てゞ見へにけり代官も理に伏し藤三も傍から　藤「コレお德夫ではおれへの約束が　德「サア違ふもお前科人を女房に仕やしやんすとお前も同類になるが合點でムんすか　藤「サア夫は　德「さはらぬ者に祟りなし藤三さんろんなものではムんせぬろへ　淨「いひまくられ流石の両面あんのんと空嘯て居たりけり　小「自身の白狀相違もあるまいッ

レ繩うて　四ヶ所「ハア、淨「と立かゝり用捨情も三寸繩コレのう中と取附く娘中を隔てる両面に伊八が心四苦八苦我子を思ふ夜るの鶴見捨る母は地獄の門出引立られて行思ひ見送る思ひは八寒の其苦しみを餘所に見る手の者共に誘なはれ泣々別れて〔ト愁三重にて皆々宜しく幕

大詰　白洲吟味の場

役人替名			
一金神の伊三郎	一両面藤三		
一神並作十郎	一根岸肥前守		
一女房お德	一侍二人		
一娘お糸	一四ヶ所大勢		
一百姓伊八			

本舞臺高二重敷臺附襖通り綸子形の唐紙上下落間屋敷塀上手に牢屋口上下に突棒六尺棒を飾り都て松本白洲の体二重に作十郎敷臺に侍二人居る時太鼓にて幕明く　○「ハア、申上升る今石村の百姓伊八娘糸暇乞の願ひ如何計らひ升せう　作十郎「肥前守様の御仁情にて此度は勘許す間伊八親子を呼出せ　○「ハア、○今石村伊八親子の者出升せい　伊八「ハア、〔ト

子役を連れて出て來る　作「今石村百姓伊八科人徳に娘糸を暇乞の義願ひ出しが大罪の科人暇乞抔とは相叶はぬ義なれども肥前守様のお情にて御免被成るぞ　伊「有難う厶り升コリヤ嬉しいの〳〵　□「ソレ科人を引出せ　四ケ所「ハア、○「ト四ケ所四人牢屋の口へ這入り「歩め　淨「ゐり「無殘なるかな女房は夫の骸に降りかゝる雨かあらぬか災難を身に引受けて縛り繩今日を限りの命にて引かるゝ心後ろ髪屠所の歩みか白洲なる莚の上に母親の變りし姿を見るよりも　お糸「ヤかゝ様か　伊「淺猿い其形りは　淨「親子妹脊の恩愛に先立つ物は涙なりお徳は顔を打詠め　お徳「チゝ伊八殿娘逢たかつた〳〵わいなァ此世では顔見る事もなるまいと思ふて居たに能う逢ひに來て下さんした　伊「コレ其方が囚はれになつた其夜さから其方を尋ねて泣わめき夜るも寐入らずうつ〳〵と○　淨「子心にさへ母親の牢舍の身をば苦に病んで「泣て斗り居る故にせめて顔なと見せ度とお願ひ申た暇乞コレお徳身に覺へもない白狀してなせ科人にゝなつてくれたぞいやい　淨「恨み歎けば　徳「ア、コレ何の覺へのない事を白狀仕升せうぞ元より覺悟の私の身の上モシ伊八殿お前の身は不自由でも○　淨「子が可愛いと思ふてなら「せめて其子が人並になる迄は○　淨「必らず繼母にかけぬ様「是ばつかりを頼み升る　淨「ワッと斗りに泣伏せば娘は母の顔詠め　糸「申かゝ様なぜ其様に泣つしやるあの伯父様を頼んでお前の傍へやつて貰ふて被下いのう　淨「顔是なき子は科人共辨

へぬ心の不愍さいぢらしさ胸も張裂〳〵斗りなり　徳「チゝ頑是ない子心にさういやるは尤じやがかゝの自由にならぬが掟申お役人様迚ものお情にあの子を傍へお許し被成て被下升せ　淨「願へば神並小首を傾け　作「如何様親子一世の別れなれば夫娘を傍へ遣はせい　四ケ所「ハア、○ソレ　淨「聞より母にすがり附き　糸「かゝ様逢たかつた〳〵わいなァ　淨「すがり附たる親と子が泣より外はなかりけるお徳は我子の顔打守り　徳「コレお糸今此母がいふ事を能う聞きや○女の子といふものは縫針が第一なればかゝがなうても能う覺へおとなしう爺様のいはつしやる事は必らず〳〵背かぬ様に仕やヤ　糸「アイ　徳「人様に憎まれぬ様にしてたもや　糸「アイ　徳「何をいふてもアイ〳〵とこんな顔是ない者を跡に殘して死んで行く母の心はどの様に　淨「あらうと斗り叶はぬ手に引寄せ〳〵抱きしめ一世の別れ母親が名殘り惜しやと血の涙とは知らぬ子は顔打詠め　糸「申かゝ様私も連れて往て下されいのう　徳「サア可愛い其方の事じやもの連て行たいけれど儘にならぬが世の習ひコレかゝはあつゝをすへに行はいのう　糸「そんなら爺様と遊んで居升る早う戻つて被下おもちやを買て來て下されや　淨「いふに伊八は堪り兼　伊「コリヤかゝの土産は三文花か手桶の水白餅より外にはないわいやい　淨「いふて泣出す親心思ひやりつゝ役人も下部も袖や絞るらん「ト時計になる　作「ソレ暇乞を致せし上は科人を引立い　四ケ所「ハア、○時刻が移る　淨「双方へ引立んとする

所へ〔ト戸家の内より〕 伊三郎「お役人様暫らく〳〵〔ト走り出で「暫らくお待被下升せう 作「暫らくと止めた其方と 伊三「ヘイ恐ながら私は伊三郎と申升て先日地藏堤にて人を殺した科人でムり升る 伊「誠に弟伊三郎 作「名乘り出ゑと子細ぞあらん近う參れ 伊三「ヘイ御免被成て被下升せ〔ト舞臺へ來る〕 德「お前は伊三郎殿 伊三「コウ姉貴如何にわしをばかばふとて覺へのない事お前が白狀してつまるものかな〇ヘイれ役人様へ申上升地藏堤で小間物屋の娘を殺し升たは私に相違ムり升せぬ私をお仕置に被成て兄嫁はお助け被成て被下升せ 伊「コレ弟其方が知つた事じやない〇ヲヽさうじや此人殺ゑは此伊八でムり升る 德「アヽコレ私の命が助けたさにお二人さんのお志し嬉しうはムんすが矢ッ張り科人は私に違ひムり升せぬわいなア 伊「イヤ〳〵おれが殺した證據は丸よ伊の字の草履 伊三「イヤおれが印も丸よ伊の字高で娘といひかはゑて居た所外の男に見替へられたが業腹紛れの無分別おれが殺した其科で兄嫁が難義と聞て見捨にならず名乘つて出たが何より證據 伊「サアお仕置に仕て 三人「被下升せ〔ト作十郎奥に向ひ「ハッお聞被遊升たか〔ト奥より肥前守出て「 肥前守「シテ訴人の者は呼寄せあるか 作「ハアヽ 肥「呼出せ 作「ハアヽ〇ッレ〇「ハッ〇両面藤三出升せい 藤三「ヘイ〔ト橋掛りより出る」 作「両面藤三其方が訴へ出たる人殺しの科人自身白狀のもの以上三人と相成り何れを何れと分ち難し訴人の其方如何思ふぞ

藤「ヘイ恐ながら申上升る人殺しは伊八に相違ムり升せぬ故女房はお助け被成ておやり被下升せ 伊三「コウ手前は何をいふのじやついぞ見た事もねへ小間物屋の娘を兄貴が殺してつまるものか幾等手前が訴人でも科人は伊三郎に違ひはねへは 藤「べら坊め其知らぬへといふ伊八の草履が殺した所にどうして落してあつた 伊三「ヲヽ其草履はおいらのだ證據は丸に伊の字の燒印 藤「さういや手めへが尤らゑいが其場にあつた提灯の裏には丸に伊の字表には今石村と書てあつたが伊三郎手前の所は今石村か 伊三「ヤ 藤「コリヤ證據の上の證據を持て訴人した両面に何の如才があるものか科人は伊八だといつたおれが誤りゥ 伊三「夫だといつて 藤「但し手前が殺しだといふに證據があるか 伊三「其證據は 藤「あるなら出せ 肥「如何樣コリヤ藤三が申通り人殺しの科人は伊八に相違ない樣なれど伊八では餘もあるまいコリヤ外にあらうぞよ 藤「アイヤお殿樣此科人を伊八といふには慥な證據がムり升るに外に科人があるとおつしやり升るは 肥「左れば身に疊りある時は自然と詞も濁る道理彼等が詞に濁りあるさはコリヤ科人は外にあるに相違あるまい 藤「シテ外にある科人のお心當りがムり升るか 肥「如何にも其科人は藤三其方であらうがな 藤「何とおつしやり升るぞ 肥「肥前守の眼力相違はあるまい藤三白狀致せ 藤「假令御上意でも知らぬへ事は存じ升せぬ 肥「コリヤ両面藤三肥前守の面を見い 藤「誠に手前は 肥「四郎太郎だ 藤「エヽ〔ト肥前守敷

臺へ下り」　肥「兄貴今にこんたは强情だねへ○〔ト袴をさくり大あぐらかくと骸中の入墨出る「おいらも元はごろ突でこんたの内で居候其時からのこんたの悪事顯はしたうはねへけれど何にも知らねへ三人の内何れ一人は死罪の科夫が誠の寃の罪盲故事といはれては國の掟が濟まねへから無據言出した元の起りは娘の捕櫛おいらが借りた其櫛を金の代りに預けたを夫を囮にかたり事夫しくじつた强腹に毒喰や皿の無分別人を殺した其罪を人に塗附け訴人して仕置にあふを高見から見る心でもさう味う何でいかれう天の綱假令親でも兄弟でも依估の出來ねへおいらが役目奉行の二字を蒙るこらは何所迄仕抜かにやならぬ詮議こんたの内の居候倶利加羅四郎太郎が肥前守となりたれば抜差おらねへ身の悪事モウばれる時節と諦め白狀して三人を助けてやるが今迄尽した悪黨の罪亡ぼしモウすつぱりと男らしく白狀するがいゝじやアねへか　藤「夫じやといつて　肥「强情張ると拷問せうゝ藤「サア　肥「罪を伏すか　両人「サア〳〵〳〵　肥「両面藤三○〔ト二重へ上つて「恐入つたの　藤「恐入升てムり升る　肥「チヽさうあらうソレ藤三に縄うて　四ヶ所「ハアヽ藤三捕つた〔ト縄をかける」　作「ソレ德がいましめ解け〔ト四ヶ所お德の縄を解く」　肥「詮議落着の上仕置申附けるソレ藤三を牢内へ引立い　四ヶ所「ハッ立う○さり〳〵歩め〔ト藤三を連れて牢内へ這入る」　肥「扨德中々下賤に似合はぬ貞節尤無實とは申ながら夫の罪を其身に引受け其方が白狀なれば疾にも仕置申附る筈の所藤三が訴人と聞し故態と仕置を延引致し置たるに案に違いず両面が仕業誠の科人出たる上は其方に搆ひないソレ作十郎申附けたる品是へ　作「ハアヽ〔ト白臺に金子百両乘せて侍に渡す侍お德の前に置く」　肥「德其方が貞節お上樣にも奇特に思召され金子を下し賜とる有難くお受け申せ　德「エヽ有難うムり升る　肥「伊八其方義此度德と離縁ゑ相成りし所德の科御免に相成りし上からは改めて肥前守か仲人にて再び結ふ妹背の縁夫婦中睦まし く猶野作を勵んでよろうう　伊八「ヘイ有難う存じ升る　肥「伊三郎其方義兄嫁の一命を助けんと名乘り出たるは誠の心御上樣にも御悦びの餘り當國に於て長く大工職の司として青ざし五十貫文下し置るゝ有難くお受け申せ　伊三「ヘイ〳〵有難うムり升る　肥「作十郎右の一件落着の義を小間物屋龜右衛門方へ申遣はし悪黨藤三近々仕置申附け娘菊下女幷に奉公人等の敵はお上樣より取遣はす間有難く思ひ升せいと申遣はせ　作「ハアヽ、委細畏り升てムり升る　肥「是にて小間物屋一件落着の上からは伊八德伊三郎悦ふであらうのう　三人「ヘイ〳〵有難う存じ升る　肥「チヽ目出度　三人「ヘイ　肥「チヽ○〔ト立て袴の塵を拂ふが木の頭「目出度い立て〳〵〔ト是にて宜しく幕

演劇脚本　桜木根岸礎

明治廿七年五月十八日印刷
明治廿七年五月廿四日發行
（定價金六錢）

版權及興行權所有

大阪市南區安堂寺橋通四丁目百卅四番屋敷
著作者故 重 扇助相續人 重 政治郎

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
版權所有者
兼發行者 中西貞行

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社
印刷者 前田菊松

164
667

088669-000-7

特52-572

接木根岸礎

重　扇助／著

M27
DBJ-0328